

全国茶品評会で農林水産大臣賞を受賞した

前原 翔太さん

機械摘みした今年の一番茶の荒茶を審査する普通煎茶10ポの部で103点の中から最高賞に輝いた。「受賞者名は僕だったけど従業員や家族、知覧銘茶研究会の関係者に支えてもらっていたんだ賞」と感謝する。

父に頼まれ、家業の前原製茶(南九州市知覧)に入って10年目の35歳。もとは茶業に進む気はあまりなく、東京農業大を卒業後、都内の中学校で理科教諭として教壇に立っていた。

茶に関する知識や技術はほぼなく、ゼロからのスタート。見よう見まねで仕事を覚え、2019年から全国品評会に出品し

かお

始めた。通算5回目での初受賞の要因を「規模拡大へ向けて従業員を増やす中で畑に出向く回数が増え、管理能力が上がった」とみる。

リーフ茶の消費低迷や後継者



不足で業界は厳しい。家族経営から企業の経営に転換し、稼ぐ農業を実現しようと、19年に茶園管理に特化した別会社を立ち上げて20〜40代の3人を通年雇用した。アナログ管理を見直し、感覚的で経験則に基づいた技術を誰でも再現できるように数値化を図る。「指標があれば予測が立てられる。お茶は特に積み重ねが大事だから」。目指すのは「お茶のプロである茶商に選ばれているいいお茶」だ。

鹿児島市中央町で妻と2歳の息子と暮らす。季節性のある職業で、繁忙期でもいかに子どもとの時間をつくれる職場環境にするか模索中。車で片道1時間の通勤中にラジオ番組「オールナイトニッポン」を聞きオンオフを切り替える。(成尾由理香)